

原爆投下前夜から
朝にかけて

私は1945年8月6日、米軍本土上陸作戦に備え、教官として下士官指揮将校教育中、爆心地から1・8kmの兵舎で被爆した。21歳の時だった。

7月26日から8月5日までの10日間、それまで毎晩のように来ていた飛行機が来なくなり、8月5日は日曜日だった。息抜きに演芸会でもやろうということになり、裸踊りあり、かっぱれあり……。今までまったく笑ったことのない、冗談ひとつ言ったことのない新潟出身のKや和歌山出身のYが、その日に限って裸踊りしちゃって……。その人たちがみんな死んだ。5日夜、9時くらい

いま伝えたい

被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

〈14〉 焼かれる寸前に意識が戻り…

でやっていたら、ウーと空襲警報が鳴った。「大変だー」と散らばって完全軍装して部署についた。いつ爆弾を落とすか待っていたらサッと帰った。これが翌朝の7時までに5回も続いた。6日の朝7時頃兵舎に帰り、午前中は就寝許可となった。

あと1日の生と死

ところが手紙を書く者あれば、洗濯する者もありでみんな寝ない。そこへ1週間前に結婚したばかりの中隊長が入ってきて、「斎藤少尉な、俺の力カアな、きれいでさ映画俳優そっくりなんだよな」そんな話をして緊張を解いてくれた。

中隊長は太い梁の真ん中の下にいた。飛行機の音がするので窓から外を見るとツーツと白いものが落ち、パーツと開いた。宣伝ビラを落としたのだと思った瞬間、ピカッと光った。その時、目の前の金魚鉢の水がボ

体験を絵に



命ある限り語り伝え

ら見に行つてこい」と毎日言つたそう。

その後、何度も失神しながら指揮官としての任務についた。門の外に出たら、「助けて」と女学生たちが皮膚を垂らし、内臓をひきずりながら歩いてた。その辺は血と体液で川になっていた。そこに「誰か刃物ないか」とおばあちゃんが叫んでいた。このおばあちゃんも頭が半分割れて黄色い脳みそが肩のところまで出ていた。その下を見たら生まれたばかりの子どもがいた。まわりはみんな裸で刃物なんて持っていないので、私が持っていた軍刀でへその緒を切った。

広島の7本の川は熱湯と化し、裸の死体であふれ、臭いもすごかった。

◇

岩手県では500人いた被爆者が今では25人。被爆を隠して亡くなった人もたくさんいる。

花巻市に帰ってからは被爆したことで空気感染すると嫌がられた。私は今でも気圧の変化で体調が左右され、船酔い気分で具合が悪くなる。

私の最終目標はすべての核兵器をなくし、緑の地球を次世代に残すこと。命ある限り、語り伝えていきます。

岩手・花巻市 斎藤政一さん (92)



記憶を風化させないために、8時15分で止まっている50個の時計と斎藤さん